

礼拝：2021年10月10日 神学校日・伝道献身者奨励日
(聖霊降臨節第21主日)

交読：交読詩編96編7～9節

聖書：詩編52編3～11節

マタイによる福音書22章15～22節

説教：「神のものは神に」 柳澤 宗光

今日は、神学校日・伝道献身者奨励日として、礼拝をお捧げしています。神の召しに応える心備えを持ち続けるようにと、わたしたちは促され続けています。そして、わたしたちの教会も、伝道献身者をお支えする献金をお捧げすることが赦される恵みを与えられています。

主が、ユダヤの宗教的指導者を批判した物語の後に、今朝、与えられた聖書箇所は、置かれています。しかし、彼らへの批判は、批判のための批判ではありません。主は、言葉と行いによって、彼らに明確な回答を示しています。そこには、真の愛があるからです。主イエスは、決して、彼らを断罪することはしていません。それが、隣人を愛するという事だからです。主イエスは、彼らをも、深く愛したのです。しかし、彼ら宗教指導者らは、批判を批判としてしか受けとめることが出来ません。主イエスの真の愛をうけとめる事が出来ない彼らは、主イエスに対し、反撃を目論んだのです。その目論見を描いたのが、今朝の聖書箇所です。その目論見の中に、わたしたちは、わたしたち自身の罪に気づかされるのです。そして、わたしたちは、主イエスの真の愛に気づかされるのです。

今まで主イエスは、三つの譬え話を通し、ユダヤの宗教的指導者を糾弾されてきました。21章28節に始まる、『二人の息子の譬え(マタ21:28-32)』では、ユダヤの指導者は父の命令を実行しない不従順な息子として、譬えられています。21章33節、『ぶどう園と農夫の譬え(マタ21:33-46)』では、悪い農夫こそがユダヤの指導者をさしているのです。そして、22章1節から始まる『婚宴の譬え(マタ22:1-14)』では、招待を断わって罰せられた客こそが、ユダヤの指導者なのです。しかし、彼らを、主イエスは、決して、切り捨てようとはしていません。

ここでは、ユダヤの指導者たちが、主イエスに対して反撃を試み、周到に練られた質問を主につきつけます。しかも、それを群衆が見ている前で行ない、主イエスが公衆の面前で、自分自身の言葉で信用を失うように計画したのです。彼らの行いは、〔合法的〕であるが故に、その陰険さが増幅されます。当時、ローマ皇帝の支配下にあり、被占領国民であるユダヤ人の衆目のもと、あえて丁寧な態度を装い、主に質問するのです。「どう思いでし

ようか。教えて下さい。皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているのでしょうか。適ってないのでしょうか(マタ22:17)。」。「ローマ皇帝に税金を納める」ことについて、「yes」なのか、「no」なのか、と問うたのです。

彼らの質問は、主イエスを〔合法的〕に、窮地に追いこむ事を目的としたものです。もし、「税金を納めるのが正しい」といえば、主イエスは民衆からの支持を失うことは、明らかです。もし、主イエスが「税金を納めないでもよい」といえば、ローマ政府にイエスを反逆者として訴える口実ができることは、明らかです。〔合法的〕に、主イエスを逮捕することが出来るのです。ローマ政府が徴集していた税金には、〔人頭税、通行税、関税〕などがありました(マタ9:9, 22:17-19, マコ2:14)。しかし、ここで問題にしているのは、〔人頭税〕のことで

この当時、ユダヤ人の領主ヘロデが、ローマによって立てられていました。そのヘロデの官廷に仕えていた人びとや、ヘロデと結びつくことによって利益を得ていた人びとのことを、ヘロデ党・ヘロデ派と呼んでいました。ヘロデ派の人びとは、ローマの権力を受け入れなくては成り立ちませんから、ローマに税金を納めるのは、当然だと考えていたユダヤ人たちです。ローマの権力に媚びるようなことをするヘロデ派。ファリサイ派の人々は、そのヘロデ派の人々を、原理的に受け入れることが出来ません。しかし、ここでは、ファリサイ派と、ヘロデ派は、結託したのです(マタ22:15-16)。なぜなのか。主イエスによって、はっきり聞こえ始めて来た神の声、見えてきた神の愛、真の愛が、彼らにとって、煩わしかったからです。主イエスに罣を掛け、主イエスを捕らえ、主イエスを抹殺しよう(マタ12:14)とするために彼らは、結託したのです。

ここで、主イエスは、デナリオン銀貨を見せるように彼らにいわれます。主イエスは、「貨幣には、だれの肖像が刻まれているか(マタ22:20)とたずねます。そして「皇帝カイザルののです」という答に対して「**それでは、皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい(マタ22:21)**」といわれるのです。

しかし、ここで聖書が描いている主イエスとの問答の中で、もうひとつ明らかになって来ることがあります。主イエスが、これらファリサイ派の人びとを、「**偽善者たち(マタ22:28)**」と呼んでおられることです。しかも、この〔偽善者〕に対して、18節では、「**イエスは彼らの悪意に気づいて言われた(マタ22:18)**」と記されています。〔偽善〕は、まさしく〔悪意〕なのです。そして、「**偽善者たち(マタ22:18)**」という言葉に続き、「**なぜわたしを試そうとするのか(マタ22:18)**」とされています。4章3節で、悪魔について、「**誘惑する者(マタ4:3)**」と言っていま

す。この「誘惑する (マタ 4:3)」という言葉と、この 18 節の「試す (マタ 22:18)」という言葉は、同じギリシア語なのです。「偽善者たち、なぜわたしを試そうとするのか (マタ 22:18)」。「なぜわたしを悪魔のように試み、誘惑するのか」と言われたのです。わたしたちが、〔偽善〕を犯すとき、そういう〔罪〕を犯すのです。

ここで、ファリサイ派とヘロデ派の人々は、賛辞を持って、主イエスに近づきました。「先生、わたしたちは、あなたが真実なかたであって、真理に基づいて神の道を教え、だれをもはばかられない方であることを知っています (マタ 22:16)。」。もしも、本当に主イエスが真理を語る真実な方であると認めているならば、その真理を受け入れ、自分の生活が変わることをも、認めなければならぬはずですが。しかし、その思いのないところから発する問いは、〔偽善者の問い〕なのです。主は、彼ら律法学者とファリサイ派の人々を〔偽善者〕 (マタ 23:13, 15, 23, 25, 27, 29) と呼ばれました。そして、彼らに、厳しい愛の忠告 (マタ 23:13-33) を与えているのです。わたしが真理を語るというのならば、「わたしを本当に信じ切って、わたしにすべてを信頼し切って、自分が変わる用意があるのか、あなたがたはその用意がないではないか」、ということです。わたしたちは、ここでも、わたしたちが、主に問いを抱く時、どんなにか、このファリサイ人に近いかということをおもいます。わたしたちも、祭司長たちのように、〔ねたみ〕 (マコ 15:10, マタ 27:18) を隠し、穏健さを装い、正論を振りかざす事はないだろかと自問します。よくしてしまう事なのです。わたしたちは、容易に、主の愛を忘れ、愛に乏しい〔偽善者〕 (マタ 23:13, 15, 23, 25, 27, 29) になり得る存在なのです。聖書に描かれた〔ファリサイ派の人々〕とは、実は、私たちのことではないかと思わざるを得ません。

主イエスは、「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい (マタ 22:21)。」と言われました。主イエスは、神の支配を明らかにするために来られたかたです。しかし、その主イエスにとって、皇帝カイザルはいかなる者であったか。ある神学者は、この「カイザルのものはカイザルに」という言葉は、カイザルに対する徹底的な主イエスの無関心を表すと言っています。主が関心を注がれたのは、「神のものを神に返すこと」、それが第一です。わたしたちが、神の支配を受け入れること、それが第一なのです。皆、神の恵みの中にあり、どの様な者も皆、神の支配の中にある (マタ 5:45) のです。

ここで、「神のもの」とは何でしょうか。それは神によって、命の息を吹き込まれ、生きる者となった (創 2:7) 私たちです。この、わたしたち自身を、神にお返しするのです。わたしたち人生は、その全てが、神のものです。わたしたちは、神のものとして生かされています。

そして、時が来れば、わたしたちは、神のものを神に、お返しするだけなのです。「からだを殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、からだも魂も地獄で滅ぼす力のあるかたを恐れなさい (マタ 10:28)」と、御言葉は語ります。そこに真実があり、そこに父なる神の、わたくしたちの髪の毛の一本までも (マタ 10:30) 数えていてくださる愛があるのです。主イエスはここで、「からだは殺すことができても魂を殺すことのできない者ども」 (マタ 10:28) と言われた時に、その魂だけが、神のものだと言われてはいません。髪の毛一本という肉体までも、権力者が殺したとしても、権力者のものにはなりません。その全てが、神のものであり続けると、主イエスは言われるのです。

そこに生きるのです。この確信に、わたくしたちは生きるのです。その時、わたくしたちは、真に自由になれるのです。わたしたちの心に巢食う、〔ねたみ〕 (マコ 15:10, マタ 27:18) から、解き放たれ、真の自由から背かれることはなくなるのです。不自由に生きないで済む自由が、ここにはあるのです。主イエスは、その自由の故に、「カイザルのものは、カイザルに返せ」と言われるのです。喜んでお返ししましょう。神はカイザルにとっても神であられるのですから。「皇帝カイザルに、皇帝カイザルのものを返す」のは、自由の証しです。その自由で生きるように、主イエスはここで促しておられるのです。地上にある全ての物が、そして全ての者が、全てを支配する方のものであるのです。

「皇帝のものは、皇帝に、神のものは神に返しなさい (マタ 22:21)。」。全ての「神のものは神に」お返しするようにと、促されているのです。わたくしたちは、〔真の愛〕にのみ抱かれ、歩み続ける事が赦されますようにと、祈りを新たにします。

お祈りします。主なるわたくしたちの神さま。今日という日を与えられた恵みを感謝致します。あなたによって、わたくしたちには、全てのものが与えられています。それにもかかわらず、心において、行いにおいて、多くの罪を犯すわたくしたちを、憐れんで下さい。どうか、へりくだった思いに生きることが赦されますように。どうか、あなたの愛の中にのみ生きることが赦されますように。主のみ名によって、祈り願います。アーメン

讃美：讃美歌 522

献金

主の祈り

黙禱